

教

可部の小さい駅の待合室には、若い人老いた人、紳士、商人、孔雀のように飾った女、田舎のお爺さん、世の中様々の人が沈黙を続けています。酒酔いが入って来ました。間もなく髪を角がりにした太った色黒い二十六七に見える狂者が、身にはつづれを着て入って来ました。「チリリンとおとしてアイドントノウ」と歌うかと思えば自分の身の上を語ります。皆の視線は狂者の上を集っています。酒酔いは狂者からかっています。狂者は女であって四十歳だと言います。狂女は突然に「なあ、おい、未来は確かかな、親鸞様は、なあ、おい、九十歳までなあ、御苦労遊ばしたぞ。すまんが死んだらなあ……。」五分十分、教えに飢えている私は胸に一ぱい満されました。魂を見失うた酒酔いと、狂者を冷笑している紳士淑女。この上は何も申しません。

尊き哉 すくわれたい心

人間最後の線

世間

「法兄よ。宗教は世間の治道具おほぎですか。そう言っている人を見ました。」

「宗教は道德とは同じものではありません。道德を敵にするものでもありません。形の上から言えば、道德を含みながら、けれども、もつと大きいものなのです。道德は世間道であります。そして宗教は出世間の問題であります。」

「世間の問題ばかりに自分全体を使っている人が大部分であります。あれを何とからんになります。あれでいいのではありませんまいか。」

「私はあんな人は皆、智慧の開けない愚者だと断言いひきります。あんな人を、『名無眼人。名無耳人』と言われています。眼はあっても眼なき人と名づけれます。耳はあっても耳なき人と名づけられています。賢いようでもちよつと高いところから見られたら、気の毒な人たちです。」

「何故に世間普通の問題のみの人を、そんなに徹底的に、権威をもって、馬鹿だと断言しますか。」

「法兄よ。その人は未だほんとうの世間を知らないからです。」

「では世間とは、ほんとうの世間とは、どんなことなのですか。」

「因縁和合によって、一時もとどまらず流れて、移り変わって行く現象を世間と言います。これといって手に握るべき、動かず変らぬものはないのです。」

「白く浮んだ雲のようにですね。」

「そうです。白く浮んだ雲のように、出来たということが消えていることなのです。山だともたちまちに消えています。美しい御殿とあこがれても、すぐそれが恐し

い悪魔の姿に変わっています。生れたということが死によって裏づけられています。会うということは別れねばならぬ最初の原因です。」

「世間ということがそうだとすれば、その世間のみ氣をとられている人は、どんな目で世間を見ているのでしょうか。」

「物皆は断えず亡びゆきつつあることを知らないが故に、ただその世間に執着しています。執着すべき何物もないのに、固く握って力にして、あくせくとして働いています。迷妄の喜びと悲しみとをくり返しています。」

「私たちの生死は何から来たのでしょうか。」

「罪から来ています。罪の値は生死であります。生れた、死ぬる、ということは罪の上のみあります。」

「罪は生死をつくるとすれば、生きていることは罪でありますか。」

「生きるということが罪であります。迷える者にのみ生死はあるのです。」

「世間は迷える者の様子、罪の上に築かれたる幻だと見ているのですか。」

「罪をはなれて世間はありません。罪によつて出来ては消えて行く泡沫を世間と言います。その世間のみ執着している者を最下等の愚者と云つて間違ひがありますか。」

「罪によつて世間があることをもつと例をあげて示して下さいませ。」

「地上には絶えざる戦いが続きます。否、戦いそのものが世間であります。」

二人の王がありました。彼等は永い間の敵でありました。いよいよ戦わねばならぬ時が来ました。何万の軍勢、幾千の軍馬のいななき、地煙あげて戦車は走ります。剣戟のふれあう音、銃砲の響、広野は間もなく修羅の巷と変つて、血の河は流れ、肉の山は築かれます。断末魔の苦しい叫び声、腕を切られ、腹をえぐられた者の戦いを呪う呻きが地上に満ちています。

戦いの様子は刻々に二人の王のところに飛んで行きます。二人の王のそれぞれの顔を注意深く考えて下さい。『我が軍が勝ちそうです。』との知らせに甲の王が高慢に笑っている時、乙の王は『我が軍の勝算なく、勢いあやうし。早く軍勢を送れ。』との知らせに、青ざめた怒りにみちた顔を考えることが出来るではありませんか。甲の王が戦いは勝つたとて天地におどつて祝宴に夜を更かす時、乙の王は、消えた火の如く、元氣を失つてただ恨みと悲しさに泣き呪っています。

乙の王の恨みと呪いにおいて、甲の王の喜びがありますか。甲の王の喜びには如何なる小さなところにも、乙の王の呪いが影となつていませぬか。

更に戦士たちの哀れなる最後の、あの物すごい呻きと苦悶と呪いと、そして死者の妻や、子や老人の歎き、かかる計量の出来ない罪をぬきにして、甲の王の歓喜も乙の王の恨みもありますか。かくの如く、要するに世間は罪によつて流れて行きます。」

「でも世間にもほんとうの感謝の一面があります。」

「未通りませぬ。水の上に描かれた絵のように。今日の親切は明日の呪いに裏づけられ、今日の歓喜は明日の悲しみの前には消え失せています。私の今の平和は『チチキトクスグカヘレ』電報一本で根本からかき乱されます。」

「世間には道徳があります、道徳の実行がどれだけ進んで来ました。道徳の根本たるべき倫理学は、ほんとうに何が善であるかを解決していますか。ただ学説を列べただけではありませぬか。地上を離れて見た時、それも現象界で亡び行く人間の、亡びゆく衣に過ぎません。亡ぶものの一種です。亡びざるものを求めるものには、食を求めて衣服を与えられたと同じことです。」

「人間は世間生死の上にあられわれ、生死は罪によって報いられたと聞きました。その罪はどこから来たのです。」

「法兄よ、罪は無明から生れます。無始の迷惑無知から行を、行から識を、識から名色を、名色から六処を、六処から触を、触から受を、受から愛を、愛から取を、取から有を、有から生を、生から老死を、(一一の説明を略す)無明から生老病死が生れたのです。」

「法兄よ、さすれば、生死をはなれるためには、無明に根ざした業を亡ぼさなければなりませんか。」

「業に縁がふれて私の刻々の生活を生んで行くので、業をはなれては私の生活はありませぬ。業とは私の根本意志なのです。一時もとどまらずして流れる川の水のように、常に業が種々なる縁にふれて新しい私を創造ゆきます。縁(私をとりまく全てのもの)をはなれては業は考えられませぬ。私は縁によって刻々生れます。過去の業は、今の私の因であり、今の私は、すぐ先(未来)の生活を生み出す業であります。ですから業をはなれることは出来ません。」

「無始からこの方、無明に根ざした業が私の生活を造るのでしたら業をはなれることは出来ませぬ。と言つて業をはなれなければ、罪と生死と迷いとをはなれることは出来ないとするれば、私は私をどうすればいいのです。」

「法兄よ。それをどうすることも出来ませぬ。」

「どうすることも出来ねば、大地の上は永えに暗黒にとざされた、呪われたる世界ではありませぬか。」

「そうです。」

「それをどうにかする教えはありませぬか。」

「こうした私に対して、高く掲げられたる教えは

『諸悪莫作 (諸の悪を作る莫れ)』

衆善奉行 (衆の善を奉行して)

自淨其意 (自らその意を淨くせよ)

是諸仏教 (是れ諸仏の教え)』

であります。

善をして悪をさけ、私の業を清めることでもあります。賢善精進の道であります。」

「尊い教えだと思えます。そうしてそれは出来ることなのでしょうか。」

「泥水に棲む魚は、泥水を吸わねば生きて行くことは出来ませぬ。泥を吸うが故に泥を吐きます。賢善精進によつて自らを清くしようと思えば、泥水を清めねばなりません。」

「地上全てが清くならない以上、自らを清くすることは出来ないというのですか。」

「私の醜さ、汚さをおいて世間の汚さはありません。又世間の汚さがなくて私の汚さもありません。清くなりたいたもがけばもがくだけ、水の汚さが知られてきて、もどかしさにゆきづまって絶望せねばならないでしょう。」

「法兄よ。教えの間違いですか、どうすればいいのです。」

「教えは万古不易の真理です。そしてその真理は私に、業を清めることの絶望を教えます。」

「法兄よ。もう教えはありませんか。」

「罪ある者の目覚めた最初、心の内に湧き出づるものは、潮のような懺悔です。全ての聖者は私のこの心境を捕らえて懺悔滅罪を教えました。懺悔は罪を滅ぼすというのです。」

「法兄よ、誠に罪の実感に伴って我が心の内に湧き出づるものは懺悔の心です。それならば私の心に解決を与えるかも知れません。」

「法兄よ。懺悔は、懺悔に立ち消えてはなりません。懺悔した罪も、時がすぎ行けば又もとの荒んだ心持ちになりはしませんか。もし又、罪を滅さんがためにことさらにする懺悔は、ソロバンをはじいた功利主義で、懺悔ではありません。ざんげは必然に湧く境地で、作らるべきものではありません。」

「何というむずかしいことなのでしょう。いったいどうすればいいのです。業の出て来るままにやっけて行けばいいのではありませんか。」

「業と縁とのふれあうままに如何なる汚い姿をも出して平気でいる者は、悪魔であります。悪魔とはとこしえに光と生命とがなくなつて、自分をも焼き、人をも焼き果てます。おお、世の中には悪魔が満ちています。」

「いったい私はどうしたらいいのですか。こんなに苦しむのでしたら、先頃のように何も考えないで暮して行ける日が幸福でした。深いことを考えねばならぬ今が残念です。」

「法兄よ、何も考えないで、ただ世間体に囚われて暮している者は、目の覚めない人たちです。土で作った人形にかわりはありません。人形はただ美しいばかりで、苦しさも、悲しさもないかわりに、幸福もありませぬ。人形たることを望みますか。」

「ああ、私は私に絶望します。昔のままなら人形であり、業の出て来るままに行けば悪魔であり、業を清めることも出来ないとなれば私は行きづまってしまいます。私は私に絶望します。」

「おお、法兄よ、法兄は尊い智慧が恵まれました。絶望して大地の上にすすり泣く法兄こそ、ほんとに大地の上に生きる人なのです。」

「ああ、法兄よ、今こそ私は『救い』がほしい。すぐわれない。」

最後の一線

「法兄よ、私は語り得る時が来ました。」

大地の上はかくして刻々の生滅と暗黒とに閉ざされて、流れ流れて行くのでした。

そこに法蔵菩薩の願生の躍動があるのです。あなたの魂に夜明けが近づく前に、あなたは夜の暗さに泣かねばなりません。長い夜を泣き明す者のみ、うららかな黎明の東の空はなつかしい。

夜は明けていたのです。あなたは、心眼の開かぬために、あなた自身で光をおおうていたのです。あなたの目は刻々に開けて来る。光と寿命のはてしなき、明るい世界が知られて来ます。

あなたは最後の一線に立っています。

「この俺が」から出でて

「法兄よ、私は確かなるものがほしいと思います。」

「確かなるものがほしい者は、不確実に望をもたねばなりません。」

「不確実とは何であります？」

「自分自身です。『この俺が』『この私が』という考えです。」

「私は、私とはなれることは出来ませぬ。自分自身をこの上なく可愛いと思います。けれど可愛い自分をどうにもすることが出来ませぬ。」

「この俺がと小さい自分の迷妄に立って自分を確かに握っている人には、迷妄でない確かなものを認めることは出来ませぬ。世間普通の人皆は、『この俺が』を持って小さい城に立てこもっています。」

「この俺の世界にこだわっている人には真実に生きる日は来ませぬ。真実に生きる喜びも、真実に愛することの嬉しさも知りませぬ。あなたはさつき救われたいと言いました。『この俺が』を投げ出すところにのみ救われる世界が見出されます。コップに清い法水を盛る前に、垢だめる腐れはた汚水を棄てねばなりません。『この俺が』という化城を出でてのみ、ほんとうの自由（不自由と対立せざる自由）な真生命の喜びにひたる事が出来る。」

救われたい心

「ほんとうの喜びとはどんなよろこびですか。」

「それは、金銭と名誉と地位と権勢とを以って買うことの出来ぬよろこびです。金銭と地位と名誉と権勢とを以って突き崩すことの出来ぬよろこびです。」

「私は過去に喜びを持ちました。けれども今の私を慰めてくれる喜びではなかったのです。水泡と消える喜びのはかなさ。」

「私の内に描き出すよろこびは、迷妄の一波にすぎませぬ。喜びと悲しみ、楽と苦、長いと短い、善と悪、明るさと暗さ、愛と呪い、地上一切は皆、表に喜びがあれば、悲しみをもつて裏づけられています。よろこびをおいて悲しみもなく、善をおいて悪もなく、悪をおいて善もない。されば心の波はすぐ消えて、常に、次々と変化してゆきますから、未通りたる喜びはありません。」

「では未通りたる喜びは、私をはなれてあるのですか。」

「私をはなれての事を、私は知ること出来ませぬ。」

「法兄よ、早く語って下さいませ。私のどこに末通りたるよろこびがひそんでいますか。」

「よろこびを得ようとする心をいらだたせる前に、もう一度法兄の魂の声に耳を傾けねばなりません。」

「私は、私に望みのないことを知り、救われたい気持ちで一ぱいです。」

「法兄よ、その『救われたい』ところこそ、平人間の最後の線線であります。実に実に、『すぐわれたい』この願いをおいては、私の何物も役に立たないのでした。」

「救われたい心がかくまで尊いところなのですか。」

「最深の智慧でございます。しかもこの救われたい心、願生の念いは、学者の胸の内にも湧けば、貧しい乞食の胸にも、目に一字を知らぬ老女にも、悪逆を行って獄屋の鉄窓の下に涙うるおす荒男の胸にも、全て、人が、

人形から、人間に

悪魔から、人間に

似而非聖賢から、人間に

と平人間にかえつて来た時、たどりつかねばならぬ、門口です。

そこに万人の行くべき大道、万人の入るべき、真実の門は開かれています。」

「救われたい心はかくも深い心ですか。ああ、そして私の心は『すぐわれたい』ころで一ぱいです。」

「この救われたいところをいっぱい満たされる教えこそ、真実の教えなのです。世間には無数の教えがあります。けれども真実と名のつくものが二つとあるべきものではありません。」

ただ一つの真実を除いたら、その外は、方便権仮でなければ、虚偽であります。

人間の魂は長い間、この『救われたい』願いを抱いたままで、方便の門と、虚偽の門とに、次から次と巡礼のあさましい旅を続けました。

けれども今や、私の前には、ただ一つの真実門は開かれたのであります。」

子の心の内に湧く信の世界

「法兄よ、何故に救われたい願いをもつたのでしょうか。法兄が尊いと言われる『救われたい願ひ』が私の内に湧いたのでしょうか。」

「自分自身と世間とに、未通つた何物もないが故に、不安心を感じた者は、この不安から救われたい願ひをもたずにはいられます。」

「ではほんとうに世間と自己とを見る目が出来たが故にとお答えになりますか。それなら何故にその智慧は生まれましたか。」

「法兄よ、親の慈悲と、子供について考えて下さい。親と子は、一つになりたい、一つになりたいと求めています。その親子を結んで一つにするものは何ですか。それは言うまでもなく、親の胸の内にあふれる慈悲をもつてです。親の慈悲をもつてのみ親子は結ばれます。」

親は子がまだ嬰兒の時から子を慈悲で育てます。けれども嬰兒にはまだ親をたづねる気持はありません。」

もし子供が大きくなった時、親の慈悲を受け入れねば、親子は結ばれることは出来ませぬ。子供は親の長い育ての慈悲を拒んで、旅に出てゆきました。親の慈悲を忘れて長い流浪の旅をつづけました。

けれども子供が親の慈悲を拒んでも、忘れても親の慈悲に変わりはありません。

親の慈悲を取り失った子も、旅の空に苦しい月日を送りました。長い病の床、冷たいせちからい人情、打ち続く不幸。こうした中に、ふと思ひ出せるのは、親の慈悲でした。『ああ救われたい』あの温かい親の懐に帰りたい。

若者は考えました。誠に、親の慈悲を拒んだ心も、親の慈悲を疑った心も、親の慈悲の育てがなければ起きては来ない。全ては親をおやと知る以前から育てられた慈悲によつて出て来たのでした。

若者は、親のもとにかえつて来ました。そうして再び親の慈悲に抱かれました。親と子は一つになりました。親の慈悲をもつて結ばれて。

親を思う子供の心は、親の慈悲が子供の内に入って、形をかえて「救つて下さい」と出たにすぎない。

親と子が結ばれて、一つになりたい。この願ひは親の心の全部であります。そうしてこの願ひを成就するものは、親の慈悲をもつてであります。

けれども親の慈悲が親の慈悲でおわるなら結ばれはさせぬ。親の心が子供の内にとどいて、子供の内に湧き出づる信の世界においてのみ、親子は結ばれます。

重ねて言う。親子を結ぶものは、親の慈悲が子供の心に届いて、親の慈悲が子の心の内で信の形となつた時、その信の世界においてのみ結ばれるのである。

法兄よ。「救われたい心がどこからわいたか」というお問いは、よい問いだと思ひます。

『我爾を護る』という慈悲が、私の内にとどいて、私の内のたてかえ、たてなおしがあつた時、私の内からは、その慈悲が、『救われたい』という願ひとなつて表われます。

『救われたい』という声は『爾を救う』という慈悲の変形にすぎませぬ。

私は眩劫より流転して出離の縁あることなき、とこしえに相對者であります。親は、この私に対して、相對に対して表われた絶対者であります。子と親は結ばれることによつて、親子以前の一如涅槃の都にかえらねばなりません。

親とは阿弥陀如来であります。子とは私であります。

阿弥陀仏の慈悲によつてのみ阿弥陀仏と私は結ばれます。けれど結ぶためには、私の内に慈悲がとどかなければなりません。

親の慈悲が届いた時、私の心は、親の慈悲によつて、救われたい願ひを持つて来ます。

『たのませせてのまれたまう弥陀なれば、たのむ心もわれとおこらず』

『弥陀たのむ心は弥陀の心にてわれとはからふことなかりけり』

救われたい心の願いは、弥陀の慈悲の変形にすぎぬ。

救われる者は、救いにはからわれて、救われたい願いをおこさせられる。

救われたい心でいっばいになった時、はじめて、『そのまま救う』の親の慈悲がわかるものとなる。

親の慈悲が、私の信の世界で、まるまるの他力となって来る。

親の慈悲（親の内では・・・救いたい）

（私の方では・・・救われたい）信

救いたい心と救われたい心との合致を信心という。親の信心によって、子と親とが結ばれた時、信心という。」

「法兄よ。すぐわれたい心は、自力の迷妄をはなれさせられて、すぐる心でありました。しかもそれが迷える魂が、お慈悲によびさまされた心でありました。救われたい心の如何に尊きかを知りました。」

気の毒なる哉 阿弥陀仏

気の毒なる哉 阿弥陀仏

如より来れる如来

如何にして如にかえるか

背水の陣を張れる阿弥陀仏

気の毒なる哉阿弥陀仏

もし我を救わずば

永劫、泣かねばならぬ阿弥陀仏

もし我、迷えば、ついて来るみ親

如来は、我と結ばれてのみ如に還る

結ばれたい心のちつともない私

私がかつか如来がかつか

気の毒なる哉、弥陀如来

背水の陣を敷ける阿弥陀仏

聞く耳もたぬ私

石礫のような私に

心の耳と目とを開かせて

救いたまえと念願させて

そのまま来いと泣く仏

気の毒なる哉、阿弥陀仏

『極楽に何の用事はなけれども

弥陀をたすけに行かざるまい』

おまかせ申した、勝手になさい

頼む心も、親から出たか

気の毒なる哉、阿弥陀仏

勝手になさい。いやいやながらおまかせしよう。」

一切勝者

「法兄よ、救われるというよりも、救わねばおかぬ慈悲でした。私は救われてあつたのでした。法兄よ、法兄は、不可称、不可説、不可思議の如来本願によつて、救われたまいしぞ。過去未来現在、三世の業障一時に罪消えておわします。」

「私の業は如何になりますか」

「私の業によつて生きながら、業をはなれていきます。業は如来によつて切られます。」

「業をはなれるが故に。」

「罪がありません。」

「罪無きが故に、生死をはなれます。」

「私の内には無量の功德を蔵せさせられています。」

「最後の聖閔を越すことの出来る無量の功德であります。」

私は一切勝者たる約束ずみになりました。この身のままだが、五十一段、慈氏菩薩と同じ位であります。正定聚、不退転であります。

残るところは大涅槃の覚だけであります。

一切勝者。如来。それはこの罪に泣く私の来るべき日の名であり実であります。

「南無阿弥陀仏を無量寿仏と申します。無量光仏と申します。信によつて、限りなき寿命と、限りなき光の主体にならせて頂きます。」

一切勝者。尽きざるいのち。如来。法兄よ。

私の魂はどん底から、慶喜にゆるぎおこされます。」

「かくて生きることとは、ほんとうになつて来ます。今こそ立て。」

人々の『救われたい魂』はまだ、死んだ神々や邪神の祠に、次から次と痛ましい巡薩の旅をつづけています。

手をとつて導こう、真理の門、万人の前に開かれたる真理の門の前に。」

五週年記念大会案内

初桜の笑みそめる三月の末、二十九日三十日三十一日の三日間、待ちに待つたる五週年記念の大会を開きます。

会場 本村中央 養専寺

行事 一、毎日午後八時 説教又は講演

二、三十日 死亡同胞十二名のために追弔会執行

団員五分間演説 出演せんと思わん方は直ちに申し込み下さい

講演 決議 余興等

三、余興 活動写真等目下交渉中

各支部はなるべく御一緒に御来会下さい。

遠方から御来会の御方には団員と団員でないを問わず、宿舎の用意をいたします9

から、なるべく早く申し込みを頼みます。団体のためには申し込みに依って（宿泊なさらない方）休憩所を用意いたします。

御来会の際は、臨時本部に出て、それぞれその係にお問い下さい。

宿泊なさる方のためには実費（一食二十銭位）で御世話いたします。

講師 本年一月中旬から、済世軍総裁真田増丸先生に御依頼してあります。未だ確定いたしませぬ。近日の内にならざるはずで、先生に来て頂けなければ、他の方を御招待いたします。その他に数名講演に従います。

本部では、仕度に総がかりです。大変な前景気です。どうか一人でも誘って御来会下さい。出来れば三日間、もしむずかしければ三十日一日でもいいからお出でを願います。

本団のマークがそれまでに出来るはずですから、御来会の際は事務所で御買い求め下さい。一個三十五銭位の見込みです。

では是非御出で下さい。本部総掛りで御待ち受けいたします。広島支部では御申合の結果、二十九日午前八時横川出発の軽便で可部から徒歩団体で御来会だそうです。加計支部から御在宅の方全部御出席との御通知がありました。近所の支部はもちろん御出でです。支部のない所の方も、どうか懐しい諸兄弟と御顔を合わせて下さいませ。では是非に。